

佑啓

ゆうけい

発行者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

和田浦の一足早い春

山口 喜男

暮らしやすい地域です。

今年の冬の寒さは南房総市といえども雪の舞い散る日が十日以上あり数年ぶりに長い霜柱を見る日が続く凍てつく思いをしました。まして和田浦の標高は高く一六五mもあるため下界より明らかに寒いわけではす。しかし、高い分だけ見晴らしは良く、晴れた日には太平洋を望むことができ、まさに絶景といったところででしょうか。ここ最近の海の色は日照時間の伸びとともに春めき、藍色から少しずつ明るさを増しはじめています。つ明るさを増しはじめています。ようやく三月、某テレビ局の南房総春の旅といった番組で紹介されるように一番いい季節を迎えようとしています。

そんな素晴らしいロケーションをもつ「ふる里学舎和田浦」は今年度開設十年という節目を迎えます。そこで、あらためて所在地を紹介しますと、旧安房郡和田町(現在の南房総市和田町)は、鴨川と館山の中間に位置します。館山道を南下、館山を経由し国道二八号線を鴨川に向かうルートが近いと思われる。電車ですと内房線和田浦駅になります。和田町の人口は約五二〇〇人、周辺の地域同様過疎化に伴う高齢化や少子化の問題を抱えています。豊かな自然環境と海の幸・山の幸に恵まれ、少しだけ都会から離れています。



五月の連休となると花嫁街道(鳥場山)を行き交う多くのハイカーが訪れます。その昔、山あいの村から浜辺へと嫁ぐ花嫁が歩いたことから名付けられたこの名前、何となく響きがよいものです。この行程約一四km、所要時間は四時間程度で、比較的傾斜も緩やかで

安心して歩ける初心者向けコースと言われています。途中、マテバシイの林、経文石、かや場等があり、自然の宿くすの木にいけるルートもあり、二六五mの鳥場山山頂から、晴れた日には富士山や伊予ヶ岳、清澄山など、房総の山々を眺望できます。



そして、なんとといっても「クジラ」の解体が有名です。昭和育ちの皆さんは戦後の食糧難の時代必ずお世話になった食材です。和田町は関東唯一の沿岸捕鯨基地で昭和二十三年から槌鯨(つちくじら)漁がはじまり、ピーク時には一七九頭もの漁獲量がありました。現在では六月から八月にかけて調査捕鯨で捕獲した槌鯨を和田漁港近くの鯨解体場に解体しています。この伝統ある食文化を伝えるため和田浦くじら食文化研究会おかみさんの会が地元小学校で鯨漁の歴史や鯨料理教室を開催したりして、過疎化で活気を失った地元を盛り上げるべく鯨食文化をもつ各地の方々と連携し積極的な活動を行っています。夏といえども一つ、和田浦海水浴場です。この海水浴場は南房総の南端に位置する「快水浴場一〇〇選」(快適な海水浴場)にも選ばれた地元の皆さんが自慢する穴場の存在ですから是非ご利用なさってはどうでしょう。



ここで、素晴らしいこの地に開設しようとするまでの軌跡をたどってみます。今から十六年前にな

りますでしょうか、県南部に入所施設が不足していることを懸念した行政担当者の要請もあり、当時の和田町町長さんと里見理事長とが出会うことから、その端を発することになります。町長さんの熱意に惚れた理事長は和田町で事業を行うことを決めることになるのですが、私が思うに性格は似ているのではないのでしょうか。後々、理事長から色々な話を聞き、お目にかかる機会をいただいたとき確信したのです。きつとすぐに馬が合ったんだらうなと。

この事業は町にとっても今後の福祉行政にとっても必要だとの信念から、今という人間の力を活用し雇用の創出も行うことができるかと判断され理事長に託したのでしよう。行政のトップの判断は周囲への配慮や後世への思いなど計り知れない重圧であると察することできます。しかし、地域を愛し事業への熱い思いがあればその決断は必ず動き出すんだらうなと感じました。(偉そうにいうと今の政治にはそうしことが欠けているのではないのでしょうか)

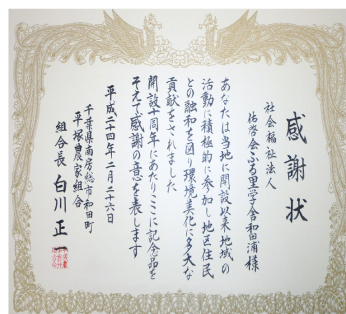
こうしたトップ同士の出会いから具体的に動き出すことになるのですが、一筋縄ではいかないのが障害関係施設の整備です。理事長曰く、もう撤退しようと思ったことが何度もあったと聞いたことがあります。それほど多難なことがいくつもあった中、両トップの信頼は厚く、出会った人を大切にしたい認知される喜びは職員も利用者も同様で地域との連帯感を実感できるこの美化運動は今後も長く続いて行くことでしょう。まさに継続は力なりです。(長年に渡り和田町では住民の皆さんが協力して道路の除草や清掃を担う共助の実践がおこなわれています。ですから、違いがわかる道になっています)そして、春浅き先日、地域の皆

絶景なはずです。

今日では入所施設の定員を削減することがあっても、建設なんてとんでもないという流れになっていきます。しかし、知的障害を持つ皆さんを支えるひとつの方法として入所施設の機能と役割は必要不可欠です。多くの方々の苦労と努力があつて結実した施設であることを忘れず、仕事も眺望も素晴らしいと評価されるよう努めて行きたいと思っています。

さて、難産の和田浦も施設のすぐ下の平塚地区の皆さんにお世話になりました。十年が経ちます。地域で暮らす以上顔の見える関係でないと双方が不安になってしまいます。何かあるとボタンの掛け違いがおこり、施設に対する不信感が募りすれ違つてしまふ。こうしたケースが多い中、地域の皆さんには開設当初から快く迎えていただきと美化運動は交流の場として絶好の機会でした。理事長の言う「福祉施設こそ社会活動にしっかりと参加すべき」の言葉通りに、身の丈に合った継続して取り組める活動でした。毎日利用する道路と一緒に掃除するこの活動は、不思議に一体感ももて、参加する利用者も生き生きとそれぞれの役割分担をこなしていきまふ。「ありがどう」や「苦勞さん、ちよつと休憩しようよ・」と声をかけてもらふことは、個人として尊重されている証です。地域の仕事を担い認知される喜びは職員も利用者も同様で地域との連帯感を実感できるこの美化運動は今後も長く続いて行くことでしょう。まさに継続は力なりです。(長年に渡り和田町では住民の皆さんが協力して道路の除草や清掃を担う共助の実践をおこなっています。ですから、違いがわかる道になっています)そして、春浅き先日、地域の皆

さんをご招待し一年のお礼も兼ねて地域交流会を実施しました。職員と家族会役員に利用者を加え平塚地区の皆さん三四名を迎えて、お琴の生演奏からはじまり太鼓の披露や歌手のステージなどで盛り上がり、一年を振り返るスライドでは一同大爆笑。厨房スタッフの手料理も上々の評判で楽しい時間を共有しました。参加していただいたのは顔なじみの方々ばかりで、十年間の交流の深さを感じました。



両トップの出会いをきっかけにはじまった平塚の皆さんとお付き合いは佑啓会をさらに飛躍させました。思ってもみないこの感謝状は改めて地域の皆さんの温かさを実感し、頂いたときの気持ちは、まるで桜が一気に開花したような思いでした。十年前の出会いから始まったこの関係を大切に、今以上の体力をつけ地域に貢献できるよう今後も努力を続けたいと思います。また、これまでご尽力頂きました多くの方々に心より感謝申し上げたいと思います。(ふる里学舎和田浦 施設長)

「男二人旅」

オーストラリア・ケアンズ

林 博樹

昨年の四月一日、辞令交付式の時のこと。永年勤続の表彰があり、「松田課長、林さん、前に出てきてください。」

二人で海外でも好きなところに行ってきた。下さい！」と里見理事長から、身に余る言葉をいただいた。折角の機会、楽しむしかない！？」

一月三十一日、いざオーストラリア・ケアンズへ！五泊六日男二人旅。

約七時間二〇分程のフライトを経て、ケアンズに降り立つ。灼熱の太陽を浴びて・・・、現地時間の朝七時ということもあり、そこまでは暑くないが半袖で十分な陽気であった。日本人のガイドがホテルまで迎えに来て、早速キュランダ観光へ出発。

『世界の車窓から』のオープニングを何年も飾っていた有名なキュランダ観光列車に乗り込み、世界遺産の熱帯雨林の中を登って行く。壮大な景色に圧倒され、長旅の疲れも忘れて見入ってしまった。

夕食はシーフードディナー。豪快な魚介類のパエリアにオーストラリア産のビールで乾杯。どのレストランにも、学生ビザ等で働いている日本人がいて、たどたどしい英語を使わずに済んだ。初日はさすがにタイトなスケジュールに疲れ、早々に就寝。

翌日はこれまた世界遺産のグレートバリアリーフへのツアーに参加。三階建ての高速船に乗り込む。最上階のデッキに上がり、一番後ろの角に腰を下ろす。海をバックにお互いの

デジカメで写真を撮る。反対側の角に外国人の男性二人組が座っていた。何気なく見ていると、必要以上にびつたりと寄り添っている。間違いない。自然に松田課長と距離を置いて座った。

途中で日本人のガイドが近寄ってきて、スキューバダイビングをしませんか？と。松田課長と珊瑚礁の中でスキューバダイビングをしている姿を想像してみた。丁寧に断りさせて頂いた。

夕食にオーギービールの石焼きステーキを堪能した後、二人は夜の街に繰り出す。が、何処に入ったら良いものか分からない。とりあえず入った店(酒場？)にも、日本人の店員がいた。

店員は学生ビザで英語学校に通いながら働いていた。オーストラリアは白人社会であり、移民を多く受け入れているが、人種差別がまだまだ残っているそう。先住民のアボリジニーも全てではないが、差別を受けている雰囲気を感じていた。確かに、街中のタクシーには「BLACK & WHITE」とペイントされていた。誰でも乗車可能との意味だと思いが、それ自体、差別があるかと思いが、その気がしてならなかった。日本のような単一民族国家とオーストラリアのような移民国家の違いが垣間みえた。人(国)それぞれ考え方が違うのは当たり前だけれど、価値観を押し付けたり、相手の存在自体を否定しているのは、世の中うま

くいくはずないなど、ふと感じた。滞在したホテルの近くにカジノがあったので、行かない理由もなく顔を出してみる。経済状況を反映しているのか、とにかく中国人が多く、日本人は殆ど見かけなかった。どう賭けるのか良く分からなかったが、スロットマシン



(静風荘 支援員)



ンに二人並んで腰を掛ける。勿論のこと、映画のようにジャラジャラと山のように出てきて、大金持ちになるなんてことはあるはずなかった。飯に出たとしても二人の秘め事になつていただろう。たまたま運の悪かつた二人は、街中の酒屋でビールを買ってホテルに戻った。

最終日の夜、二人で部屋のバルコニーで一服しながら、「あつという間だったな・・・楽しかったな・・・。」満天の星空は輝いていなかったが、この旅行で外国の地から自分を見つめ直すことが出来た。ツアー中に何人も日本人と出会った。彼(女)らはワーキングホリデーや永住権を取って、ケアンズを生活の拠点にしていた。みんな生き生きと楽しそうに働いていた。何となく羨ましかった。きっと、異国の地で生き甲斐を持って暮らしているのだろうと想像できた。

今の自分はどうだろう？仕事にやり甲斐が持てているだろうか？ほんの少しばかり悩んだ。でもすぐに、いろんな事があつたけれど、この仕事が好きで、ここまでやってこれた自分自身をしっかりと見つめる事も出来た。これからは壁にぶち当たった事は多いと思うが、ケアンズで目にした人達のように好きな仕事ならやっていけると信じている。そんな自分自身のそのまの姿を、今年入った沢山の静風荘の新人職員には見てもらいたくな

い。大した気遣いもできなかった私を楽しませて下さった松田課長、このような機会をいただいた理事長に心から感謝したい。ありがとうございました・・・。暫く景色を眺めて感慨にふけていた。

「きずな」

藤田 久美子

「絆」震災後、よく目や耳にします。我が家の絆を繋いでくれる息子、健太郎十八歳。普段は穏やかで、とても優しく癒し系♡日々小さな感動を与えてくれる天使ですが、時々、悪魔へと豹変！？てんかんと知的障害を持つ自閉症です。

最初の発作は生後六ヶ月の時。呼吸が止まる強直間代発作。このまま息が止まってしまふのではないかと、発作の度に強い不安を感じた。静岡の専門病院へ八ヶ月間の母子入院をしました。当時、上の娘が六歳でした。主人や同居している主人の両親の支えがあり、決断する事が出来ました。息子の存在が、家族の絆を強く結び付けてくれました。現在、服薬は続けていますが発作は止まっています。

小学校二年、特殊学級に通っていた時期。パニックが酷くなり、物を投げる行為が激しく、普段使いの食器を全てプラスチック製の物へ変えた事も。学校側も対応が難しく、養護学校への転校を決めました。主治医から「日常生活を送れる状態にする事が優先」と安定剤を飲み始めました。今思うと家族がいちばん辛かった時期です。

「ふる里学舎」と出会ったのはそんな時でした。当時は支援費制度も始まる前で、成人施設のため児童の受入れは稀でしたが、学校が休みの時に日中受入れをして頂ける事になりました。新しい物好きの息子は喜びました。多動な息子に職員の方々が振り回されていた事でしよう。当時の職員に会うと必ず「落ち着きましたね」と言

われます。あの時はバワフルでした。理事長室のテレビを落とそうとしていましたからね」と言われた事も。あれから九年以上のお付き合いになりましたが、本当にお世話になりました。児童受入れが始まってから拠点はアネッサへ。洲上先生は悩みや愚痴を聞いてくれる頼れる子育ての大先輩。いつも「大丈夫！」と前向きな言葉を掛けて頂きました。担当の宮崎先生は、快く相談やお願いを聞いて下さいました。恐らく宮崎ブラックリストには名前が記載されていたと思いますが・・・常に言うて下さったのが「不安定な時こそ利用して下さい」と。その一言が何よりも嬉しかったのです。いざと言う時に頼れる場所がある事で、気持ちが楽になります。家を脱走して本人は目的があつての行動(交通量の多い夕方の十六号線の中央分離帯に居る所を、偶然通り掛かった本川先生に助けられた事もありました。我家の歴史に残る大事件です。本当にありがとうございました。



三月に学校卒業後は、通所でお世話になります。イケメンと言われる息子、ジャニーズやモデル学舎のパンフレットには載せて頂きました(「GLAY」を熱唱する姿はミュージシャン！？・・・そんな選択肢の中から選びました。(笑)いっばん息子らしくいられる場所です。これからもマイペースで、「天好き？」と言いつける姿が想像されます。そんな息子の成長を家族と共に見守り、支えて頂きたいと思っております。これからも宜しくお願い致します。

アネッサデイセンター利用者 藤田健太郎さん(母)

編集後記

大震災から約一年。私の実家も被災し、先日、久々に実家へ戻ると町全体が変わり果てた姿に・・・復興には何十年もの月日がかかり、先が見えない状態です。そんな不安を抱えながらも、いつか復興できる日を願っています。

今回の震災で、全国各地の方々が支援を受け、人は支え合いながら生きていくことを改めて感じました。皆様笑顔で毎日を過ごせるように祈りながら、佐啓七十九号をお届けします。

支援員 猪狩 宏恵